怠惰ぐらし希望の第六王子

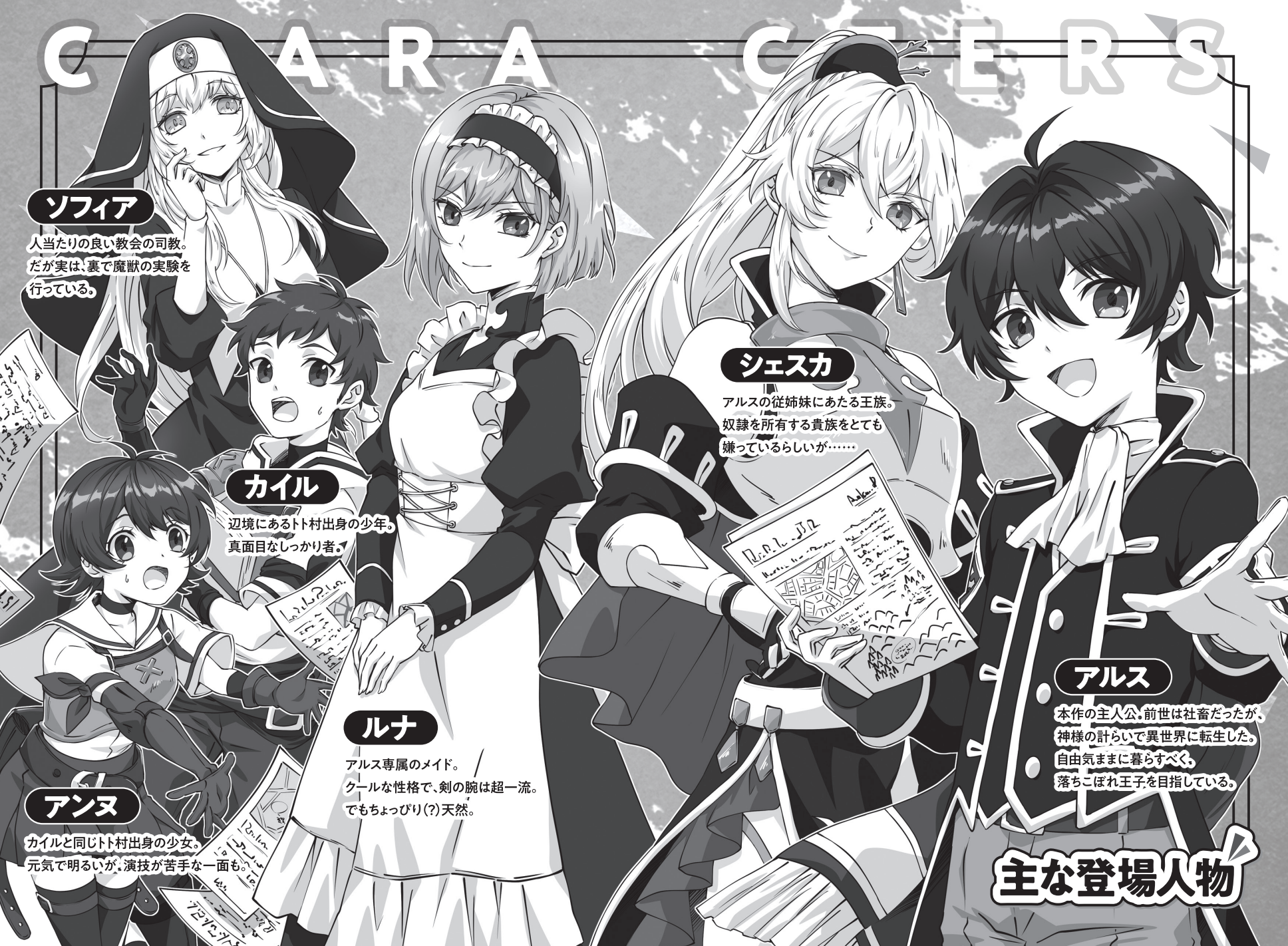
Taida gurashi
kibou no
Dai roku ouji

悪徳領主を目指してるのに、なぜか名君呼ばわりされています

2

著
服田晃和

illu.
すみうた


CHARACTERS
ソフィア
人当たりの良い教会の司教。
だが実は、裏で魔獣の実験を
行っている。
カイル
辺境にあるト村出身の少年。
真面目なしっかり者。
ルナ
アルス専属のメイド。
クールな性格で、剣の腕は超一流。
でもちょっぴり(?)天然。
シェスカ
アルスの従姉妹にあたる王族。
奴隷を所有する貴族をとても
嫌っているらしいが……
アルス
本作の主人公。前世は社畜だったが、
神様の計らいで異世界に転生した。
自由気ままに暮らすべく、
落ちこぼれ王子を目指している。
アンヌ
カイルと同じト村出身の少女。
元気で明るいが、演技が苦手な一面も。
主な登場人物

第一章

前世で過労死という結末を迎えた俺は、『神様』のおかげで剣と魔法の世界で新たな人生を歩めることになった。

しかも大国の第六王子――アルスとしてというオマケつきだ。

初めはその地位と権力に浮かれまくり、自由な生活を満喫しようとした俺だったが、そんな暢気な考えは早々に空の彼方へと吹っ飛ぶことになる。

兄達が繰り広げる政権争い。第六王子である俺がその争いに巻き込まれるのは目に見えていた。その予想通り、兄達はあの手この手を使って俺を自身が所属する派閥に取り入れようとしてきた。

その手から逃れるべく、俺は一つの決断をすることになる。兄達が俺を取り入れようとしているのは、俺に利用価値があるからだ。

ならば逆に自分の価値を下げてやろう。そう決めた俺は、無能な『ちょい悪徳領主』を目指してエドハス領で領主代理を務めることにしたのだった――

◇

そんな俺だが、先日敵対国である帝国の使いを見つけたことで、領民からは『名君』と噂されるようになってしまっていた。

そのせいで数日、俺は屋敷にこもって一人落ち込んでいた。

折角『ちょい悪徳領主』への道を歩み始められたと思っていたのに、まさか真逆の道に突き進んでいるなんて、誰が予想出来ただろう。

正直、もうすべてを諦めて『名君』として生きていこうとも考えた。こうなった以上、勝ち目のある派閥に所属し、荒波にもまれながらも生き抜いていくしかないのだと。

しかし、ここで諦める俺ではなかった。

何者にも邪魔されず生きていきたいという、自分の願いを叶えるという意思もあったが、それよりも諦めてはいけない理由があった。

それが俺の専属メイドのルナだ。

俺が『名君』として噂されるようになったきっかけは、彼女の何気ない勘違いにあった。

そして俺が部屋にこもっている原因が自分のせいだと知った彼女は見た目では分かりづらいが、

かなりのショックを受けてしまっていた。

このまま俺が道を曲げてしまえば、より一層責任を感じてしまうことだろう。

それは俺の望むものではない。ルナが傷つき悲しむことだけは、絶対に避けなければならない。

だから俺は『ちょい悪徳領主』になるべく、もう一度立ち上がることにしたのだった。

◇

「ふぅ……なんだか緊張するな」

数日ぶりにやってきた冒険者協会の前で、俺は不安気に息を吐く。

この扉を開けば、また冒険者達から羨望の眼差しを向けられるかもしれない。その不安が、俺の足を止めていた。

だがこのままここで突っ立っているわけにもいかない。俺は覚悟を決めて扉を開け、共に来たルナ、そして奴隷のカイルとアンヌと一緒に中へと入っていく。

俺の姿に気が付いた冒険者達が、ヒソヒソと話し始めた。

「ねぇ見て、アルス王子よ！」

「お、本当じゃねぇか！　もしかしてまた街の危機を救いに来てくれたのかもしれねぇぞ！」

冒険者達の期待あふれる妄想話が聞こえてきて俺は思わず顔を下に向ける。噂というものは一日二日では消えないものなのだと、当事者になって初めて理解した。
だがその噂も今日終わらせてやる。
俺の来訪に騒がしくなる場を通り抜け、一直線に受付の場所へと向かう。そこにいた受付嬢のメレーナは、俺の姿を見てニコリと笑みを浮かべてみせた。
「アルス殿下！　おはようございます！　本日はどういったご用件でしょうか⁉」
穏やかに笑うメレーナの顔を目にし、俺は一瞬気が抜けてしまう。
だが即座に気合を入れなおし、『ちょい悪徳領主』らしくニヤリといやらしく笑いながら話し始めた。
「ああ、おはよう。実は君達冒険者に依頼があってきたんだが、受付はここでいいのか？」
「はい、ここが受付になります！　どんな依頼でしょうか？　私達に出来ることであれば、なんでも協力させてください！」
メレーナはそう言うと気合の入ったポーズを取ってみせる。どうやら俺が大きな依頼を持ち込んだと勘違いしてくれたらしい。
狙い通りにことが進み始めたことで、俺は少しずつ本来の調子が戻ってくる気がした。
「それを聞いて安心した。実は今回の依頼はとても重要なものでな……熟練の冒険者達に頼みたいのだ」
「重要な依頼ですか⁉　そ、それでしたら支部長室でお聞きいたしますので！　どうぞこちらへ――」
俺の話を聞き、メレーナは慌てて受付のカウンターから出ようとする。俺はそんな彼女の手を取ると、静かに首を横に振った。
その態度に困惑の表情になるメレーナ。周囲の冒険者達も聞き耳を立てているのか、俺達の会話を静かに見守っている。
そんな冒険者達に聞こえるよう彼らの方へ身体を向けると、大げさに手を広げながら口を開いた。
「いやここで良い。ぜひとも有能な冒険者の諸君に話を聞いておいてもらいたいのでな！」
「か、かしこまりました！　では依頼内容をお聞かせ願いますでしょうか⁉」
依頼の内容に期待を膨らませるように、ソワソワしだすメレーナと冒険者達。
俺が街の窮地を救った『名君』であるといまだに信じている彼らは、俺の手伝いが出来るまたとないチャンス。そう思っているのだろう。
俺は周囲の高揚した雰囲気に思わず笑みを零しそうになる。だがそれをぐっとこらえたあと、深刻な面持ちで話し始めた。
「ああ。……実は私の大事な大事な『家族』がいなくなってしまってな。冒険者の諸君に探し出し

てもらいたいんだ」
「アルス殿下のご家族ですか⁉　それは国の一大事ではありませんか！」
「そうなのだ！　だからより有能な冒険者達に探してもらいたい！　依頼料はいくらになっても構わない……頼めるか？」
涙ながらに訴える俺の言葉に、周囲の冒険者達がすすり泣き始める。第三者からすれば、俺は家族の身を案じる優しい王子にしか見えていないはずだ。
「もちろんです！　今ハルス支部にいる冒険者となると……『金級』の『白麗の翼』が最高級の冒険者パーティーになります！　他にも『赤級』の冒険者がいますのでご安心を！」
冒険者はその実績や能力で『階級』が分けられる。新人とも呼ばれる『白級』から始まり、『青級』『黄級』『緑級』『赤級』と階級が上がっていく。
その最上位が先ほどメレーナが話してくれた『金級』と呼ばれる存在だ。『金級』は大型の魔獣を討伐出来る優れた冒険者であり、我がドステニア王国内にも数えるほどしかいないのだ。
メレーナが自分の右目からあふれた涙を拭きながら、俺の前にそっとハンカチを差し出してくれた。俺は彼女からハンカチを受け取り、両目の涙をぬぐう。
太ももをつねり上げて流した偽の涙を拭き取ったあと、俺は服の中から一枚の紙を取り出した。それをカウンターの上に置くと、再び涙声で訴え始めた。

「ありがとう！　それで探してもらいたい『家族』なのだが……この子なのだ！」
「……え？」
紙に書かれた『家族』の似顔絵を目にしたメレーナは、自分の目を疑っているようだった。何度も目をこすったあと、「嘘ですよね？」とでも言いたげな顔で俺を見つめてきた。
そんな彼女に対し俺は眉一つ動かさず、真剣な眼差しでメレーナの眼を見つめ返してやる。
俺の真剣な目つきを見て、メレーナはようやく冗談でないと理解したのか、顔を引きつらせながら紙を指さした。
「あ、あのぉ……こ、この子ですか？」
確認のために問いかけてきたメレーナの言葉に、俺は力強く頷いてみせる。
「そうだ！　私の大切な『マシュちゃん』を、一刻も早く探し出してもらいたい！」
「えっと……猫ですよね？」
げんなりした様子で呟くメレーナ。
周囲の冒険者達も彼女の言葉を聞いて、自分の耳を疑っていた。こんなに騒がしくさせておいて、まさか捜索対象が猫だとは思いもしなかったのだろう。
明らかに少し前とは空気が変わりだしていた。「なんだ猫かよ、しょうもねぇな」。そんな言葉がチラホラと上がり始める。

その瞬間、俺は紙を手に取って冒険者達に向かって訴えかけていく。先ほどの人間味がある表情とは違い、冒険者達を見下すような目つきで睨みつけていく。

さらに『悪徳領主』が言いそうな、自己中我儘発言をかますことで俺のイメージを最悪なものに落とすのだ。

「猫だったらなんだというんだ！　私の大切な家族だぞ！　このエドハス領の領主である私の家族なのだ！　何よりも優先して探し出すのが、冒険者の仕事だろうが！」

復帰後初だというのに中々の傍若無人な発言に、思わず心の中で自画自賛してしまう。周囲の反応もまずまずといったところだ。

だがこの程度の信用低下で喜ぶ俺ではない。今俺の支持率アンケートを取れば、まだまだ高く出るだろう。

それではだめなのだ。俺が目指すのは『ちょい悪徳領主』に相応しい支持率なのだから。

「は、はい！　かしこまりました！　では猫の捜索依頼ということで『青級』に依頼させていただきます！」

俺の高圧的な態度に負けたメレーナが、カウンターの下から依頼の受注票を取り出し俺に差し出してきた。

俺はその紙を手に取ると、びりびりに破いて床へ投げつけてやる。

床に散らばった紙を見て呆然と立ち尽くすメレーナ。そんな彼女に対し、俺は再び声を荒らげて詰め寄った。

「『青級』だと⁉　ふざけるな！　私のマシュちゃんを何だと思っているんだ！　最低でも『赤級』以上に頼むに決まっている！　さっさと依頼を発行しないか！」

俺が声を荒らげていくにつれ、周囲の視線がだんだんと冷ややかなものに変わっていく。流石の冒険者達も、理不尽な俺の態度を見て呆れ果てたのだろう。

「か、かしこまりましたぁ……では『赤級』の扱いで依頼を受理させていただきます」

「ふん。最初からそうしとけばいいんだ！　では頼んだぞ！」

出来れば『金級』の冒険者達に依頼出来れば最高だったのだが、流石に猫の捜索依頼をその階級の者達に依頼することは出来ない。

そのため、『金級』の下の『赤級』に依頼を振るのが最善手だ。

呆れた様子で受注票に内容を記載していくメレーナ。それを確認したあと、俺はサインをして振り返る。

次の瞬間、近くにいた冒険者達が後ずさりして道を開ける。その視線は羨望とは程遠い、軽蔑の感情がこもっていた。

「なんだよあれ。久しぶりに来たと思ったら、ペットの捜索依頼だって？　しかも『赤級』以上の

冒険者に依頼を受けさせろって、無茶言いすぎだろ」
「なんか聞いてた話と違うな。街を救った領主ってのも、アイツが自分で流した嘘だったりして――」
俺が通り過ぎたあと、後ろからヒソヒソ声が聞こえてくる。その内容に満足しながら俺は小さく頷いていた。
するとその時、協会の入口から一人の女性が入ってくるのが見えた。真っ白な鎧に身を包んだ、金髪の見目麗しい女性。
おおよそこの場には似つかわしいと思えないその女性は、周囲をキョロキョロと見回し始める。そして俺を見つけると、ニヤリと笑みを浮かべた。
その女性は一直線に俺の方へ近づいてくる。突如現れた女性に冒険者達も動揺しているようで、場は異様な空気に包まれていた。
その女性は俺の前で歩みを止めると、思い切り抱きしめてくる。
「久しぶりだな、アルス！　お前が領主代理になったと聞いて、激励に来てやったぞ！」
「シェスカ姉様！　お久しぶりです！　お元気そうですね！」
俺が満面の笑みで返事をすると、シェスカ姉様は優しく頭を撫でてくれた。
彼女の名前はシェスカ・ドステニア。俺の父であるユリウス・ドステニアの弟、オーロフ・ドス

テニアの愛娘だ。つまり俺の従姉に当たる存在である。
彼女はこの世界では珍しく、二十二歳の独身貴族だ。交際相手がいないという点で、生前の俺と似ているため、俺は勝手に彼女に親近感を抱いていた。
しかも、面倒な派閥勧誘もしてこないということで、俺にとっては数少ない、安心して話せる相手の一人なのだ。
だからというべきか、ここ数日意気消沈していた俺にとって、このタイミングで彼女に会えたことは、とても喜ばしいことだった。
「ははは！　お前も意外と元気そうだな！　その年で領主代理なんてまだ早いと思っていたが、案外上手くやれているみたいではないか！」
「えへへへへ、そうですか？　ルナやルイス達に助けてもらっているんです！」
姉様に褒められて俺は少し頬を染めながら、隣に立つルナの方へと顔を向けた。シェスカ姉様がそれにつられてルナの方へ視線を向ける。
ルナは即座に頭を下げて、姉様に挨拶した。
「お久しぶりでございます、シェスカ様。公務でご多忙の中、アルス様への激励に来てくださりありがとうございます」
「なに、少し暇が出来たから様子を見に来てやっただけだ！　それにしても、相変わらずアルスに

べったりだなお前は！　あまりアルスを甘やかしすぎるなよ？　常にお前が傍にいられるとは限らないのだからな！」
「承知しております」
シェスカ姉様に少し怒られたルナは、サッと後ろに足を引いて俺から距離を取った。
姉様はどうやらルナが俺を甘やかしていると思ったらしい。むしろ俺の方がルナの態度とか仕事内容を激甘で査定してやっているのだが。
先日の件についても、ルナだったから許してやっているのだ。もし他のメイド、例えばオレットが勝手に指示していたとしたら、給料半分カットくらいじゃ済まさないだろう。
「アルスもあまりルイス達に頼り切るのは止めるんだぞ！　領主としての経験を積める良い機会なのだ！　失敗を恐れずに自らの判断で動いてみるがいい！　たとえ失敗したとしても、それは将来の糧になる！　分かったな⁉」
「はい！　将来、兄様達を支えられるように精一杯頑張ってみます！」
姉様に活を入れられ、俺は思ってもないことを口にする。その言葉に姉様は嬉しそうに頬を緩ませた。
しかし、姉様の視線が俺の背後へと向けられた瞬間、その表情は一変した。
怒りに満ちた瞳を浮かべた姉様を見て、俺はハッとする。

「アルス……この二人の服装……二人はお前の奴隷か？」
落ち着いた声で俺に問いかけてくるシェスカ姉様。だがその声色とは裏腹に、姉様の瞳は殺意すら感じられる冷たさで俺を見つめていた。
この時、俺は忘れていたのだ。
シェスカ姉様が最も毛嫌いしている存在。『奴隷を所有した貴族』になってしまっていたことに。
そう、真面目な彼女は奴隷を所有している貴族を、とても嫌っているのだ。
「……そうです。カイルとアンヌといいます」
その瞳から逃げるように視線を逸らしながら、呟くように答える。
名前を呼ばれた二人は緊張した様子で姉様に向かって頭を下げた。
その瞬間、姉様は俺の胸倉を掴み、激昂しながら声を上げた。
「アルス、貴様奴隷を買ったのか!!」
姉様の声に周囲が騒がしくなる。張り詰めた雰囲気をなんとかしようと、俺の背後にいたルナと姉様の護衛が俺たちの間に割って入った。
「シェスカ様、これには理由がございまして――」
「貴様には聞いていない！　アルス、私の目を見て答えろ！　お前はこの二人の奴隷を買ったのか！」

ルナの制止を振り払い、俺を睨みつけるシェスカ姉様。
見たこともない姉様の表情に、俺は声を詰まらせる。結局、言葉を出すことが出来ず、頷くことしか出来なかった。
俺が頷いた瞬間、シェスカ姉様の右手が俺の頬をぶつ。
「……馬鹿者が！」
涙を流したシェスカ姉様が、外へ出ていく。
物理的な痛みはほとんど感じなかったが、俺はその場に倒れこんだ。
あのシェスカ姉様に嫌われた。悪徳領主として一花咲かせるどころか、俺は数少ない信頼できる人を失ったのである。

それから屋敷に帰った俺は、子供のようにボロボロと泣き散らした。
折角再起をかけて冒険者達協会へと足を運び、うまく評判を落とせそうになった瞬間、尊敬するシェスカ姉様に嫌われてしまったのだ。
「アルス様……どうか元気を出してください。アルス様の話を聞けば、シェスカ様もきっと分かってくださるはずです」
ベッドにうつぶせになっている俺をルナが慰めようと優しく声をかけてくれる。そんな彼女に対

し、俺は枕を放り投げた。
「うるさいんだよ！　だいたい、お前が余計なことしなければ、そもそも冒険者協会に行く必要もなかったんだ！　全部、全部ルナが悪いんだからな！」
「……申し訳ございません」
ルナはいつもの無表情で、静かに頭を下げる。普段と変わらない態度に、俺はもう一度声を荒らげそうになるも、彼女の手が震えているのを見てそれを止めた。
俺が今彼女の行動を責めたところで、結果は変わらない。
元はと言えば、先日のルナの勘違いは、俺がルナとよく話しておかなかったことにも責任がある。それにどんな理由があれ、奴隷を買ったのは俺だ。
シェスカ姉様に嫌われたのはルナのせいではない。
冷静に考えればすぐに分かるはずだった。でも、そう思えない自分もいるのだ。
「もう放っといてくれ！　俺には構わないでくれよ!!」
ルナの顔を見ることなく告げると、しばらくして扉が閉まる音だけが聞こえた。
一人部屋に残った俺は、ベッドに寝転がり天井を眺めながら小さく息をはく。
すると、徐々にではあるが、気分が落ち着いてきた。
シェスカ姉様に嫌われたとはいえ、俺の人生が今日この瞬間終わるわけではない。

長ければあと七十年ほどはアルス・ドステニアとして生きていかなければならないのだ。
「冷静に考えろ……俺の目的は、ルナと自堕落な生活を送ること。シェスカ姉様に頭を撫でてもらうことじゃないだろ」
落ち着いて考えれば、この状況はチャンスでしかなかった。
冒険者協会の人達に今の俺は、『帝国の間者を炙り出すために、子供の奴隷を使って策を講じた名君』だと思われている。
理不尽な猫の捜索依頼を出したとはいえ、その噂が消えるのはもう少し先になるだろう。だがあの場にシェスカ姉様がやってきて、俺の顔面に一撃を食らわせてくれたおかげで、追い風が生まれたはずだ。
その場面を見た奴らは余計に考えるだろう。やはり噂は間違いだったのではないか？　本当は、自分の趣味のために子供の奴隷を買った、下劣な人間だったんでは？　奴隷よりも猫を大事にする人間なのではないか、と。
思考を巡らせ始めると、だんだん頭の中がクリアになっていく。俺はベッドから飛び起きると、机の上に置かれていたベルを激しく鳴らした。
すぐにルナがやってくるも、彼女は少し不安そうにしている。
数分前に激しく責められたのだからこうなってしまうのも当然だ。

しかし、これからの計画において、ルナは重要な存在になってゆく。だからこそ、俺は誠実な態度で彼女に頭を下げた。
「すまなかった！　俺が自分勝手なせいでこんな目に遭っているのに、ルナを責めてしまった……本当に申し訳ない！」
心からの謝罪をルナに告げる。これで許してもらえるとは思っていない。俺はルナを傷つけたのだから。彼女が許すというまで、何度でも頭を下げよう。そう思っていると、すすり泣く声が聞こえてきた。
まさかと思い、俺は顔を上げて彼女の方を見る。そこには、両目から涙を流しながら、必死に声を出さないよう口を押えているルナの姿があった。
「ルナ⁉　ど、どうしたんだ！　もしかして、俺が投げた枕が当たったところが痛むのか⁉」
俺は慌ててルナの元へと駆け寄り、彼女の身体を確認していく。枕が当たったところが腫れている様子はないし、他に異常をきたしている個所も見当たらない。
涙の原因が分からずうろたえていると、ルナが涙声でぼそりと呟いた。
「……してください」
「え？　なんだ⁉　何かして欲しいことあるのか⁉」
俺が彼女に問うと、ルナは両手を横に広げて、もう一度お願いを口にした。

「ぎゅって……してください」
初めは冗談かと思ったが、ルナの真剣な眼差しがその考えを否定する。
普段無表情を崩さない彼女が、俺の前でこんなにも感情を剥き出しにしたのは初めてだ。
俺は深く息を吸い、ルナの身体を優しく抱きしめる。
「こ、これでいいか？」
自分から女性を抱きしめるなんて初めての経験だ。
これで問題ないのか、ルナを不快にさせていないか不安で仕方がない。だがルナの両手が俺の背中に回ったことで、その不安はすぐになくなった。
お互い相手を苦しませないような力で、優しく抱きしめる。
「もう、放っといてくれだなんて言わないでください……」
「ごめんな。もう絶対に言わないから……これからも俺の傍にいてくれ」
俺はルナにそう告げながら、抱きしめる力を少しだけ強くしてみる。俺がどれだけルナのことを大切にしているか。それが彼女に伝わって欲しいと、そう思ったから。
その力に反応するように、ルナの力も強くなる。なんとなく、自分の心が丸裸になっている気がして、少し恥ずかしくなってきた。
だがルナは俺を離そうとせず、しばらくの間こうして抱きしめ合っていたのだった。

◇

翌日。朝食の際、俺とルナのどこかぎこちないやり取りを見て、他のメイド達がキャーキャー騒いでいた。

なぜか執事のルイスからも「おめでとうございます」との言葉をもらうしまつ。全員が何かを勘違いしているみたいだが、ルナが嬉しそうにしていたので、あえて否定することはしなかった。

そしてその日の午後、俺は屋敷の応接室でシェスカ姉様と対峙していた。俺の後ろにはカイルとアンヌ以外にも、先日トト村で購入した子供の奴隷達が並んで立っている。

どうせ嫌われるなら、シェスカ姉様にも俺の悪評を広めてもらうべく、改めて呼び出したのだ。

「話があると言われて来てみれば……お前がこんな馬鹿なことをしているとはな」

奴隷達の姿を見て怒りを露にするシェスカ姉様。

そんな姉様に俺は開き直った態度で、ニヤリと笑みを浮かべてみせる。その顔を見たシェスカ姉様の眉が一瞬ピクリと動いた。

また殴られるかもと恐怖するも、俺は気合を入れて口を開いた。

「馬鹿なことだなんて、姉様も分かっていませんねぇ！　この子達は、自ら望んで俺に買われたんですよ！　なぁカイル、そうだよな？」

「はい……」

俺の問いかけに、カイルは作り笑いしつつ返事をした。その後すぐに、カイルは顔を歪めてみせる。

もちろん、これは事前に決めておいた段取りの行動だ。演技派のカイルなら上手くやってくれると思っていたが、ここまで上手に表情を変えるとは驚きだった。

シェスカ姉様はカイルの演技に気付かず、俺を睨みつけながら机を力強く叩く。

「あれが、望んで買われた奴隷の姿だと言うのか⁉　ふざけるのもいい加減にしろ！　あの子達が悲しんでいるのがまだ分からんのか！」

「言いがかりはやめてくださいよ！　子供達はみんな、この屋敷で楽しく暮らしていますよ？　なぁゾーイ！　昨日も俺と一緒にみんなで楽しく遊んだよなぁ？」

俺はゾーイをこちらに呼びつけて、頭を撫でながらそう問いかける。その問いかけに、彼は満面の笑みを浮かべながら答えてくれた。

「はい！　昨日はアルス様と一緒に、いーっぱい遊びました！　凄く楽しかったです！」

「ははは！　それならまた一緒に遊んでやろう。今度はアンヌも一緒にな！」

「本当ですか⁉　ありがとうございます!!」

アンヌもまたゾーイと同じような顔で嬉しそうに笑ってみせる。二人の言葉と表情は、カイルとは違い、嘘偽りのないものだった。
二人にはカイルのように、演技の指示はしていない。八歳のゾーイにシェスカ姉様を騙すような演技をさせるのは無理があるだろうし、アンヌは大根役者だ。
だから俺は、ゾーイが嘘をつかなくても良いように昨日の午後を使って、本当に遊んでやった。
鬼ごっこやかくれんぼ、戦いごっこまでしてやった。その結果が、今の返事を生み出したのだ。
それを知っているアンヌは、普通に遊べると思って喜んだ。
その二人の無垢な笑顔に、シェスカ姉様は信じられないといった様子で俺を見つめてきた。
「……馬鹿な！　こ、こんな子供達と、お前は一体どんな遊びをしたというんだ！」
「ただの遊びですよ！　もちろん、沢山楽しませてあげましたがね！」
姉様の頭の中で『遊び』という単語がどのように変化を遂げているかは分からない。だが間違いなく、文字通りの意味では理解していないだろう。
その判断が間違っていないと思わせるべく、俺は下卑た笑みを浮かべて姉様を見つめた。
俺の表情を見て姉様はすべて悟ったのか、深く息を吐いてゆっくりとその場で立ち上がる。
以前は輝いていた姉様の瞳が、暗く沈んだ闇の色へと染まっているように見えた。
もう俺があの頃の姉様に会えることはない。覚悟を決めていたとはいえ、やはり心にくるものは

あった。
だがこれで俺の評価はガタ落ちすること間違いない。シェスカ姉様がこの事実を広げれば、俺が帝国の間者を炙り出したなんて噂も消えてなくなるはずだ。
「少し……待っていろ！」
そう言うと姉様は護衛を引き連れて部屋の外へ出ていってしまった。緊張の糸が切れたのか、身体が急激に重くなる。俺は盛大に息を吐いて、背もたれにもたれかかった。
「ああぁぁ、しんどかった！　カイルもありがとうな！　お前のおかげで、シェスカ姉様も完全に騙せたぞ！」
「ありがとうございます。でも……本当によろしかったのですか？」
カイルは心配そうに俺の顔を見つめる。俺はその問いに答えることなく、静かに微笑んだ。
カイルには昨日俺のすべてを打ち明けた。実は俺には自堕落な生活を送る目的があること。その目的のために、悪徳領主を目指していること。
その話をした時、カイルはかなり引いていた。まぁ目的が変だし、自分のところの領主が、悪徳領主を目指していると宣言する奴だったら誰でも引くし、怒るだろう。
だが領民を傷つけるような行動はしない。一年後にはこの領地にある膿と共に消え去る。そう説得したら、カイルは渋々協力すると言ってくれた。

だがその話を知らない他の奴隷達は、無垢な笑顔で話し始める。
「ゾーイは良いなぁ！　俺もアルス様と一緒に遊びたかったのに！」
「オレットさんは、勉強のが大事とか言って、全然遊んでくれないもんなー！　仕事は簡単だから良いけど……」
「アルス様、今度は私達とも遊んでくださいよ！　ゾーイばっかりズルいです！」
ブツブツと文句を言うミゲルとエリナ。オレットは意外と真面目なようで、俺が指示したことをしっかり守っているらしい。こんなことなら、遊ぶ時間も与えるように指示しておくんだった。
「分かった、分かった。オレットには遊びの時間も作るように言っておくから。その代わり、勉強も仕事もしっかりやるんだぞ！」
「わーい!!　ありがとうございます、アルス様！」
嬉しそうにはしゃぐ子供達を見て、ありもしない過去を妄想する。
俺にも彼らと同じように、同年代の子供達と遊ぶ時間があったら、一体どうなっていただろう。こんな馬鹿な考えなど浮かばず、立派な王子になるよう行動していたかもしれない。
だがもしそうだとしたら、俺の隣にルナはいないだろう。いたとしても、今のような関係になれるとは到底思えない。
互いが互いを尊敬し、尊重し合うそんな関係。ルナと出会ってからの七年があったからこそ、俺

達はそこに辿り着けたんだ。
ルナの方をチラリと見ると、彼女は僅かに口元を緩めてみせる。それだけで身体の芯が熱くなり、俺は頬を紅く染めながら目を逸らした。
やはり、シェスカ姉様に嫌われようとも、ルナとの生活を離す気にはなれない。それを再確認出来ただけでも本当に良かった。
その時、応接室の扉が勢い良く開かれた。そこには先ほど出ていったシェスカ姉様の姿がある。だが一緒に出ていったはずの護衛の姿がなかった。
「遅くなってすまなかったな。どうしても……お前に見せなければならないものがあったのだ」
「見せなければならないもの？　いったい何ですかそれは――」
姉様の言葉に少し不安になる。
もしかして、俺を裁くような何かだろうか？　そんな不安が脳裏をよぎり、手に汗がにじみ始める。その直後、姉様は部屋の外にいる何かに声をかけた。
「おい、お前達！　さっさと歩かんか!!」
姉様の声に続くようにじゃりじゃりと、鉄がすれる音が聞こえてくる。その音と共に、姉様に引きずられてなにかが、この部屋の中へと入ってきた。
それらの物体を見て、あまりの衝撃に言葉を失う俺と幼い子供達。

俺はそれらが視界に入らないように、咄嗟にゾーイの目だけでも両手で覆った。
「姉様……それはいったい」
「これか？　これは……私の奴隷達だ！　さぁお前達、しっかり挨拶をせんか！」
姉様は手に持った鞭で、奴隷達の尻を思い切りぶっ叩く。バチーンともの凄い音がしたかと思うと、奴隷達は一斉に鳴き声を上げだした。
「ぶひぃ！　ぶひぃ！　ぶひぃ！」
「わはははは！　そうだそうだ！　しっかり鳴いて、挨拶しないとなぁ！」
恍惚とした表情で奴隷達を叩き続けるシェスカ姉様。奴隷達の顔をよく見ると、二人とも先ほど出ていった護衛達だ。
驚愕の事実に俺達が全員ドン引きしているのにもかかわらず、姉様達はその行為に没頭している。
だが何とか我に返った俺は、一度子供達を部屋から退出させたあと、意を決して姉様に問いかけた。
「あの……シェスカ姉様。どういうことか、説明していただけませんか？」
「ん？　ああそうだったな！　実は私にもお前と同じような性癖があってな？　屈強な男の奴隷共をこうして跪かせて、鳴かせるのがたまらなく好きなのだ！」
奴隷達を鞭で叩きながらそう語るシェスカ姉様の顔は、人体実験が大好きなサイコパス聖女——

ソフィアとどこか似ていた。
姉様は話しながら何度も何度も、奴隷達の身体を鞭で叩いていく。その度に醜い声を上げる奴隷達。
だがなぜか、奴隷達の顔はどこか嬉しそうだった。
「いやぁ、まさかお前も私と同じだったとはなぁ！　この性癖のせいで、他の貴族と結婚も出来ず、誰にもバレないように過ごしてきたのだ！　だがこれからはお前とこうして話せると思うと、気が楽になったぞ！」
「え……いや……俺はその——」
「どうした？　何か問題でもあったか!?」
シェスカ姉様に問われ、俺は言葉を喉で詰まらせた。なぜそんな風に思ったかは知らないが、シェスカ姉様は俺の奴隷との交流を見て、自身との共通点を見出したようだ。
「実は全部嘘だったんです」だなんて、もう二度と言えない。姉様は俺を同類と思って秘密を打ち明けたのだ。その俺が、普通の性癖の持ち主だと知れば、恥ずかしさのあまり姉様の方が自死しかねないだろう。
俺の計画は、砂城のように瞬く間に崩れて消えていく。だが今目の前で起きていることに比べれば、そんな些細な問題どうでもよかった。

敬愛するシェスカ姉様は、ただの変態でドS女王だったのだ。

◇

姉様に奴隷好きだと打ち明けられた翌日。俺達は街から離れた森の中へとやってきていた。

「いいか、お前達！　これは我々にとって、初めての勝負だ！　負けたらタダではすまさんぞ！」

「は！　シェスカ様！」

「アルス達に負けでもしてみろ！　お前達にはキツイ仕置きが待っているからな！」

「お、お仕置き……ッツ……はい！　頑張ります！」

そう、これからここで、お互いの奴隷が狩った魔獣の数を競う、魔獣狩り対決が行われることになったのだ。

ここは普段冒険者達が魔獣の狩場として使っている場所。だが今日は冒険者の姿はどこにも見えない。

それもそのはず。今日はシェスカ姉様のために、俺が冒険者教会の支部長、オルトに頼んで冒険者が森の中に入らないよう、警戒令を出すよう指示したのだ。

その結果、姉様は人目を気にせず初めて趣味の奴隷遊びが出来ると大はしゃぎしている。

俺はそんな姉様を横目に、防具に身を包んだアンヌとカイルに魔法を付与していった。

「あー……二人共。無理しなくていいからな？　一応『身体能力上昇』と『防御上昇』と『攻撃上昇』の魔法は付与してあるから、大丈夫だろうけど。一時間くらいしたら戻ってこい」

「承知しました！　怪我しないようにだけ気を付けます！」

カイルは色々と察しているのか。少し苦笑いを浮かべたあと、元気に返事をする。しかし鈍感なアンヌはというと、やる気満々といった様子で息を荒らげていた。

「任せてください！　絶対にアルス様の顔に泥を塗るような真似はしませんから！　頑張って沢山狩ってきます！」

「いや、頑張りすぎなくていいと思うぞ？　相手は大人の男だし。怪我しないようにだけ頑張ってこい」

そう言いながら姉様の奴隷達の方をチラリと見る。姉様に『お仕置き』と言われたせいか、奴隷の二人は頬を紅潮させてフーフーと鼻から荒い息を出していた。

もうあの二人が魔獣を狩ってくることなんて、絶対にないだろう。彼らも、姉様の本当の目的はお仕置きすることだと分かっているだろうからな。万が一狩ってきたら、お仕置きに失敗した姉様の真の怒りに触れることになってしまいそうだ。

◇

奴隷達が魔獣狩りのために森の中へ入ってからしばらくしたあと、姉様が嬉しそうに頬を緩ませながら俺に話しかけてきた。

「ふふふ。楽しみだなぁアルス！　どちらの奴隷が多く魔獣を狩ってこられるか……こんな勝負を出来る日が来るとはな！　これもすべてお前のおかげだぞ！」

「ハハハ……姉様が喜んでくださって、俺も嬉しいです」

興奮した様子の姉様に乾いた笑みを向ける。

もう後戻りは出来ないところまで来てしまった。姉様が死ぬまで、俺は一生彼女の『奴隷大好き仲間』として生きていくしかないのだ。

俺が苦悶していると知らない姉様。ニヤニヤと笑いながら森の方を見つめていたと思うと、突然カッと目を見開いて声を上げた。

「アルス！　そういえば、興奮しすぎてすっかり本題を忘れていたぞ！」

「え、本題？　まだなにか重たい話でもあるんですか？」

姉様の勢いに、俺はこれ以上重たい話が来るのではないかと思わず身構える。しかし姉様の口から出てきた言葉は、俺の想像とは違うものだった。

「お前、クルシュとレオンの勧誘を避けているそうだな⁉　以前会った時に、クルシュの方がぼやいていたぞ！　どうするつもりなんだ⁉」

姉様に問われ、俺は顔を下へと向けた。

折角忘れ去っていたことについて、姉様のせいで思い出す羽目になるとは。

憂鬱な感情が波のように押し寄せてくる。

だがここでそれを顔に出すわけにもいかず、俺は少し悩んでいるといった様子で悲し気な笑みを浮かべながら話し始めた。

「実はそうなんです……まだ覚悟がつかないというか、なんといっていいか。そんな中途半端な気持ちでどちらの兄弟につくか選ぶことなんて、俺には出来ませんから」

俺が話し終えても、姉様はただじっと俺の顔を見つめている。その直後、姉様は俺の肩に手を置き、穏やかな微笑みを浮かべた。

「アルス、お前は派閥勧誘から逃げるために領主代理の職務に就いたのだろう？」

見透かしたようなシェスカ姉様の言葉に思わず目を見開くと、彼女は続ける。

「私には嘘をつかなくても良いんだぞ？　この性癖を共有した仲ではないか！　私達の絆は、誰にも引き裂けるようなものではない！　そうだろ？」

「シェスカ姉様……ごめんなさい」
優しい言葉をかけられた俺は、涙を隠すようについ姉様に抱き着いてしまった。
姉様は一瞬戸惑ったようだったが、「謝らなくて良いんだ」といいながら、俺の頭を撫でてくれた。
そんな姉様の優しさに、俺の両目から涙があふれ出していく。
謝罪の言葉の真意を伝えられず、俺は唇を噛み締めることしか出来ない。それを知らぬ姉様は、会話を続けていった。
「あの二人は自分達が地位や権利を得るために必死だからな。さぞかしお前への勧誘もキツイものだっただろう。かく言う私も、何度もつまらんアプローチを受けたものさ」
「姉様もですか？　でも、姉様は……」
俺は言葉を詰まらせながら、顔を上に向けて姉様の顔を見つめる。それに対し、姉様はニヤリと笑ってみせた。
「ハハハハ！　私は面倒事は嫌いだからな！　どちらの派閥にもつかないと、陛下と父に宣言したのだ！　それ以降、奴らからの勧誘はなくなったぞ！」
そう言いながら嬉しそうな顔を浮かべる姉様。
俺はそれがたまらなく羨ましかった。そんな豪快なこと、俺には絶対に出来ない。姉様が女性

だったからこそ出来た選択肢だといえる。
俺がそんな発言したとしても、「馬鹿なことを言うな」と一蹴されるか、新しい派閥を作る気かもしれないと深読みされてしまうだけだ。
「すみません。姉様みたいにハッキリと言える人間じゃなくて……」
「謝ることなどない！　派閥勧誘から逃げるためとはいえ、お前は立派に役目を果たしている！　それなら誰にも文句は言われる筋合いはないさ！」
姉様は俺を慰めるように力いっぱい抱きしめてくれた。
俺も姉様を力いっぱい抱きしめ返す。俺の思惑通りに行っていないとはいえ、姉様に褒めてもらえるなら良しとしよう。
穏やかな笑みを浮かべていた姉様だったが、森の木々がざわめき始めたのと同じころ、その美しい顔を曇らせていった。
俺は少し心配になり、姉様の名を呼んだ。
「シェスカ姉様？」
「……アルス。お前が考えているよりも、我が国の闇は深いぞ。上手く逃げたと思っているだろうが、奴らはお前の力を欲しがっている。そのためならどんな手でも使ってくるだろう」
俺の頭を撫でながら、悲しそうに笑うシェスカ姉様。この国の闇を見てきた姉様だからこそ、俺

の身を案じてくれているのだろう。
それから姉様はひとしきり俺の頭を撫でたあと、ニコリと笑みを浮かべた。
「まぁ安心しろ！　何かあったら私を頼ってくるとよい！　奴隷好き同士、私に出来ることなら力を貸してやるさ！」
「姉様……ありがとうございます！」
姉様に感謝の言葉を告げ、ギュッと抱きしめる。もしこれから何かあったら、姉様を頼らせてもらおう。
そんなこんなで時間は過ぎていき、一時間後。ホーンラビットを三体とビックボアを一体狩ってきたカイルとアンヌと、魔獣を一匹も狩ってこなかった姉様の奴隷達が帰還した。
「何たる様だぁ！　貴様らそれでも私の奴隷かぁ！　恥を知れぇ!!」
そう言って息を荒らげながら奴隷達を鞭で叩く姉様の顔は、今までで一番生き生きしていたのは言うまでもない。

◇

姉様の趣味に付き合ってから、三日が経った。俺はベッドに横たわり、一人部屋の中で身体を休めている。
今日はルナも仕事が休みなので、自室で休んでいることだろう。
魔獣狩りを楽しんだあと、屋敷に帰ってきてから寝るまでの間、姉様の性癖について話を聞かされる羽目になったのだが、それが身体的にも精神的にもかなりの苦痛だった。ストレスで飯が喉を通らなくなったのは言うまでもない。
そんなこんなで今朝ようやくシェスカ姉様は自分の領地へと帰っていったのだが、結局俺の評価を下げることは出来ずに終わった。
まぁよくよく考えてみれば、領主代理になってまだそこまでの時間は経っていないのだ。
その期間だけで、俺の人間性や能力を判断出来るとは兄様達も思っていないだろう。
これからゆっくり、じっくりと悪評を広めていけばいい。
鈍感な俺はそんなふうに気軽に考えていたのだった。

◇

シェスカ姉様が去ってから二週間後、俺の元へ、とんでもない報が舞い込んで来た。
「サイクス領から移住希望者がやってきているだと!?　一体何がどうなってるんだ！」

報告書に書かれた内容を見た俺は、思わずルイスに問いかけた。
書類には千人の移住希望者が隣領であるサイクス領から、最寄りの街であるエドハス領のオスガリアへ向かっていると書かれている。
ルイスは手に持っていた追加の資料を俺に手渡すと、淡々とした様子で語り始めた。
「領主がアルス様に変わったことで、エドハス領の政策が改善されたと噂が流れているようです。農民達への待遇改善の政策が、移住の理由ではないかと」
「まだ施行してからあまり時間も経っていないのに、そこまで広がっているのか……まさかトト村の件が、隣領にまで影響を出すことになるとはな」
俺は書類を見つめながら唇を噛み締める。
ルイスの言う農民達への待遇改善というのはおそらく、領内の貧村に対し行った二年間の免税と一時的な補助金を与える政策の件だろう。
俺が帝国の間者に襲われて少しの間屋敷にこもっていた時、暇だったのでたまには領主らしい仕事でもするかと考えたのがその政策だ。
なぜこんなことをしたかといえば、トト村ばかりを優遇するわけにはいかなかったから。ただこれに尽きる。
俺は少し前に魔獣の被害を受けたトト村を経済的に支援した。『悪徳領主』目線で言えば、一つの村だけ優遇しやがってと悪評を広めるチャンスになるだろう。
しかし、それでは優遇を受けたトト村も迫害される危険性がある。それは俺のポリシーに反するため、平等な政策を取るしかなかった。
名君として評価が上がってしまうのを避けるために、今回は適度の支援を行ったつもりだったのだが、それでもまだやりすぎだったらしい。
だがいくらなんでも移住を決めるには早すぎるのではないだろうか？
「なぁルイス。サイクス領は余程困窮しているのか？　いくら隣の領地だからといって、この規模で移住が起きるなんて……あまり言いたくはないが、領への反乱みたいなもんだぞ？」
少人数の移住ならまだしも、千人以上が同時に行動を起こすなんてそうあり得ない。誰か移住を先導した人間がいるか、それとも他に移住せざるを得ない状況に陥っているかの二択だ。
後者ならまだいいが、前者ならば警戒しなくてはならない。もしかしたら、兄達の策略によるものかもしれない。そんな不安が脳裏をよぎる。
だがルイスの話を聞いてそれも俺の考えすぎだったのだと知った。
「私も詳しくはないのですが……エドハス領と同じように、農民達が魔獣の被害によって思うように作物の収穫が出来ていないと耳にしております」
「そうだったのか。王城で暮らしていた時は知らなかったが、どこも大変なんだな。領主は何か対

策を打たないのか？」
「そういった話は聞きませんね。サイクス領の領主は浪費癖が酷いともっぱらの噂ですから……」
そこまで言うとルイスは口を閉じて苦笑いを浮かべた。察してくれと言いたげなその顔に、俺は盛大な息を吐く。
ルイスが言いたかったのは、サイクス領の領主は領民のことなど考えない自己中な人間だということ。貴族に対する悪口になってしまうから、ルイスも言葉を濁すしかなかったのだろう。
だがルイスが知っているということは、その領主の悪評はかなりの範囲に広まっているということだ。
なんと羨ましいことだろうか。本人の性格と普段の行いによるものなのは理解しているが、それでも羨ましい。俺は狙って悪評を広めに行っているというのに、ソイツは何もしなくても悪評が広まっていくのだから。
「はぁ……クソ、腹立ってきた」
隣の芝生は青く見えるというがまさにその通りだ。羨ましさを通り越して、怒りすら覚えてしまう。だがまぁ、俺の怒りは一旦置いておこう。
なぜなら、ルイスの話を聞いて分かったことがあるからだ。
それは今回の件に、兄様達が関与していないということ。サイクス領の領主のような利己的で馬鹿な人間を、彼らが派閥に入れておくはずがない。
つまり、移住者の受け入れについては何も警戒しなくていいということになる。
「よし、話を戻すぞ。報告書には千人程度と書いてあるが、サイクス領の人口はどのくらいなんだ？」
「昨年の資料によれば、約三十万人だそうです。三年ほど前までは二十五万人を下回っていたようですが、ここ三年でかなり人口が増えたようです」
ルイスの報告を聞き、俺は小さく安堵の息を漏らした。
領民が減るということは、それすなわち領地の税収に影響を及ぼすということ。千人も領民が減ると聞いて若干不安になっていたが、三十万人のうちの千人ならどうってことないだろう。
「なるほど。エドハス領よりも少し多いくらいか……それなら別に問題ないな。千人なんて大した数でもないだろうし、受け入れてやればいい」
「……よろしいのですか？」
俺の発言にルイスは眉をひそめた。
おそらく、サイクス領の領主から難癖をつけられることを懸念しているのだろう。領地から逃げ出したとはいえ、客観的に見れば財産を奪われたようなものだからな。
「心配するなよ、ルイス。サイクス領の領主は確か、ルーミヤット子爵だ。二度ほど顔を合わせた

こともあるし、こっちから文を出せば強く言ってはこられないさ。文句を言われる前に、金でも送っといてやればいい」
「……承知いたしました。では移住希望者は全員受け入れるということで、よろしいですね？」
「ああ、そうしといてくれ。移住先はなるべくバラけさせるようにな」
俺の指示を聞き、ルイスは静かに部屋を去っていく。久しぶりに領主らしい仕事をしたので、脳内が仕事モードへと切り替わっていた。
「なんかやる気出てきたなぁ！　次の作戦についてでも考えるとするか！」
手元の資料を読み漁り、この機に乗じて何か出来ないかと策を巡らせる。ただ移住問題はかなりデリケートなものだ。適当な策を打てば、修復不能なダメージを追う可能性もある。ここは慎重に考えていかねば。
ルイスから渡された報告書を眺めていると、ふと頭の中にルナの言葉がよぎった。
それは、この街に初めて来た時のことだった。最近魔族の移住者が増加しているという話を聞いたのだった。
「確か奴隷商のレイゲルのところに魔族の奴隷がいたはずだったな。彼らを使って、なんか出来ないか考えてみるか……」
前回奴隷を使った作戦で失敗しているというのに、俺はまたもや奴隷を使った策を練り始める。

だが今回はその失敗を踏まえて考えることが出来るため、そこまで心配する必要はないと思っていた。
「魔族、魔族、魔族が住みやすい街……そうだ！　魔族優遇の政策を取れば良いんだ！　人間達の血と汗の結晶である税金。その大半を、魔族の待遇改善のために使うと発表すれば、間違いなく領民の反感を買うことになるぞ！」
魔族といえば、昔は人間と争っていた存在として知られている。
今はその戦争も集結し、魔族と交流を盛んに行っている国もあるのだが、それでも魔族ばかり優遇されたら、良く思わない人は多いだろう。
すぐに案を思いついた俺は、手元の報告書に目を移し、移住者達の内訳を確認し始める。
移住というのはそう簡単に出来るのものではない。ドステニア国内で移住するといっても、その際には正式な手続きを踏む必要がある。
そこでなくてはならないのが、名前や種族等が記された『市民権』と呼ばれる紙だ。それを希望の領地に提出しなければ、住んでいた領地へ強制送還されてしまう。
この報告書は、境界付近で兵士達が移住希望者の『市民権』を確認して纏めたもの。まだ全員の確認が終わっているわけではないが、そこに『魔族』の文字はなかった。
「よし！　サイクス領からの移住者は全員『人間』だな！　これなら魔族の大群が押し寄せてくる

なんてことにはならないだろう！」
魔族を対象に優遇政策を行うのだから、今回と似たような形で、魔族の移住希望者が増える可能性を考慮しておかないとマズイ。
噂が広まる速度は、その対象となる人数に比例する。今回は極少人数の魔族を対象にした政策であるため、噂が広まるには時間がかかるだろう。
それに噂が広まったとしてもそこまで問題はない。魔族を優遇する領地に移住したい人間などいないはずだ。つまり、魔族の移住希望者が増えるほど、人間の移住希望者は抑制される。人口が急激に増減するなんてことにはならないだろう。
そう思い、俺はいつものようにベルを鳴らして彼女を呼ぶ。
ルナはすぐにやってきて、俺の前で頭を下げた。
「アルス様、お呼びでしょうか」
「ああ。実はルナにちょっとお願いしたいことがあってだな。急で悪いが、レイゲルに連絡を取ってくれるか？　明日には店に行くから、魔族の奴隷を用意しといて欲しいんだ」
実際に魔族優遇の政策をするなら、魔族を近くに置いておいた方が色々と動きやすいだろう。
「承知いたしました。では明日の十時頃に伺うと伝えておきます」
ルナはそう返事をすると僅かに微笑んで部屋を出ていった。

あの件以来、ルナは俺の前で良く笑顔を見せるようになった。仲が深まったということなのだろうが、スキンシップも増えてきたのは少し辛い。
他の貴族達はどうだか知らないが、メイドに対して欲情するなんてこと、俺の中ではあってはならないことだった。彼女達はあくまで仕事で傍にいてくれるだけ。そこに恋慕を抱くなど失礼極まりない。
それに、ルナに特別な感情を抱いているといっても、それはあくまでも『尊敬』と『信頼』からくるものであり、恋愛感情であるはずがない。
俺は少し冷静になるため、その場で何度か深呼吸を行ってから再度報告書を眺めだす。
「ふぅ……問題は魔族の奴隷達だな。俺の計画に乗ってくれるかどうか……まぁ上手くいったら奴隷から解放すると契約すれば承諾してくれるだろう」
今回の作戦は、俺だけでなく彼らも憎悪の標的になってしまう。本来は避けたい道ではあるが、この作戦を決行する代わりとして、彼らの身の安全は俺が必ず保証する。そうすればきっと、魔族の奴隷達も俺の作戦を受け入れてくれることだろう。
この作戦が上手くいった暁には、未来の自堕落生活に大きく近づくことになるはずだ。

◆

一方その頃、ドステニア王国魔導士団の面々達は、頻発する魔獣被害の対応のために魔獣討伐の任に就いていた。

サイクス領から離れた距離にある高原で、魔獣を狩り続ける一行。そんな戦闘の最中、集団の後方でのんびりとくつろぐ男がいた。

「クルシュ様！　予定していたワイバーンの群れの討伐ですが、まだ少し時間がかかるとのことです」

報告を聞いた男――ドステニア王国第三王子のクルシュは、その内容に眉をひそめてみせた。

もう既に戦闘が始まってから一時間以上は経過している。それなのにまだ時間がかかると告げられ、少しの苛立ちを見せていた。

「どういうことだ？　報告では群れは十体だったはずだが……今あそこで死にかけている奴で十体目じゃないのか？」

「も、申し訳ございません！　どうやら幼体が数体残っているらしく……アレが終わり次第、すぐに編制を組みなおして殲滅に向かわせます！」

クルシュに睨まれた部下は、その圧に動揺しながらも必死に言い訳を並べていく。

普段は冷静で部下思いのクルシュだが、使えない人間には容赦がないことを部下は理解していたからだ。

だが部下の言い訳を聞いたクルシュは、すぐに表情を元に戻して穏やかな笑みを浮かべてみせた。

「そうか……その程度なら問題はない。陽が沈む前に終わらせるようにするんだ。必要であれば私を呼べ。いいな？」

「は！　承知いたしました！」

クルシュの笑みを目にし、部下はホッと胸を撫で下ろす。部下はそのままクルシュに頭を下げると、背後で行われていた戦闘へ参加すべく駆けだしていった。

その背中を見つめながら、クルシュは小さなため息を零す。

本来であればこんな場所へ来る必要もなかった。だが国王陛下の勅命とあっては断ることは出来ない。

正直面倒なことこの上ないが、部下の練度を見るいい機会だと割り切るしかなかった。

そんな気だるそうなクルシュの背後から、馬が駆け寄ってくる音が聞こえてきた。

馬に乗っていたのは一人の男。その男の顔を目にしたクルシュは驚いたように目を見開いて立ち上がった。

「リゲット？　なぜお前がここに？　王城で何かあったのか!?」
目の前で行われていた戦闘など気にも留めず、クルシュはリゲットと呼んだ男に詰め寄っていく。それほどまでにクルシュが動揺しているのには、理由があった。
このリゲットは、魔導士団第四部隊で隊長を務めている男なのだ。
その第四部隊は現在王都に駐在しているはず。その隊長がなぜ今この場に一人でやってきたのか、クルシュには見当もつかなかった。
だがクルシュに詰め寄られたリゲットは、急いで馬上から降りるとクルシュの前で膝をついてみせる。
そしてリゲットはそのまま冷静な態度を崩さずに口を開いた。
「失礼いたします、クルシュ様。ルティウスより報告書が届きました。急ぎ、クルシュ様に渡してほしいと。なんでも……魔石（ませき）の新しい活用方法について資料をまとめたとのことです」
「ルティウスからだと！　それは本当か!?」
リゲットの言葉を聞いたクルシュは、さらに大きく目を見開いて驚きを露（あらわ）にする。だがそれは先ほどのような不安からくるものではなく、期待と興奮が合わさったものだった。
リゲットから報告書を受け取り、急いでその内容を確認していくクルシュ。
そこに書かれていたのは、報告通り新たな魔石の活用方法。しかしその内容はあまりにも酷く、

立ち読みサンプル
はここまで

どう見ても実現不可能なものであった。
しかしそれを見たクルシュは、ゆがんだ笑みを浮かべてみせた。
喜びと興奮のあまり、自分がどんな表情をしているのかにもクルシュは気付いていない。それほどまでに報告書の内容は、クルシュの興味を惹（ひ）くものだったのだ。
「サイクス領で問題発生……移住者がエドハス領へ……自分もその波に紛（まぎ）れるべきか？」
クルシュが口にした言葉は、報告書のどこを見ても書かれていない言葉であった。だが『暗号』を知るクルシュにはその内容が読み取れていたのだ。
報告書に書かれた真の内容を理解したクルシュは、手のひらの上でそれを灰にする。
その文章に紛れる『暗号』を解読出来ぬ人間から見れば、魔石の活用方法にしか見えぬ内容ではあるが、万が一に備えて証拠は残さない。
「クックック……なるほど。じつにルティウスらしい視点からの考え方じゃないか！　引き続き彼には頑張ってもらい、成果を上げてもらいたいものだ！」
「そうですな。きっとルティウスもクルシュ様のためにより一層の成果を上げるべく、研究に力を注ぐことでしょう」
クルシュとリゲットはそんなことを口にしながらお互いの眼を見つめる。
リゲットもまた報告書の内容を理解していた人物のひとりであった。だからこそことの重要性を